

1 横須賀市内コース①

- ◆ JR横須賀駅 — ◆ バス停衣笠城址 — ◆ 衣笠城址
- 搦手 — ◆ キヤゴの谷戸 — ◆ 衣笠城址山頂 — ◆ 大善寺 — ◆ 土塁 — ◆ 不動の井 — ◆ 武者隠し — ◆ 磨崖仏
- ◆ 満昌寺 (三浦義明の廟所)

搦手

衣笠城へは、搦手（裏手）から登るほうがいい。『源平盛衰記』にみるように、当時の合戦は一对一で戦う個人的武勇を重んじた、弓、刀で戦う騎馬戦であり、しかも、大手と搦手から攻めるといふ慣例があった。しかし、必ずしも、それが守られていた訳ではなく、のちに衣笠城は、合戦に備え、全山に切岸、平場を廻らし大改造をしている。搦手からは、このひな壇式の遺構を見ることができる。



キャゴの谷戸

衣笠城には、古くから六口七作十二谷戸むぐちななせきしじゅうにげとという呼称があった。その意味は、六つの登り口があり、防衛上、廻らされた七つの柵があり、十二の谷戸やとがあったということらしい。キャゴの谷戸は、古老がそう呼んでいた谷戸の一つであり、キャゴという意味は不明だが、ここから戦闘用の礫石れいしの集積跡が発見されている。当時の戦法には、山城の頂きや要所に構築した櫓うすの上から、礫石や、大木を落とすというものもあり、石や大木は、有力な戦闘力として活用されたのである。

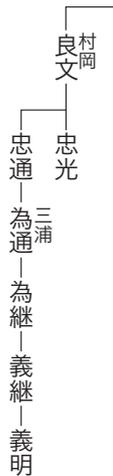
衣笠城址

衣笠城は、前九年の役で鎮守府將軍・源頼義に従った相模の三浦為通たみちが康平六年（一〇六三）、築いたとされる山城である。



衣笠城址の碑と物見岩

桓武天皇—葛原親王—高見王—高望王たかもち

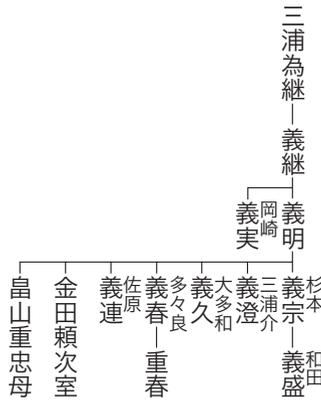


頂きが本丸跡（市指定）であり、現在の大善寺の地が二の丸跡とされる。この衣笠山には、すでに、平安貴族が信仰していた金峰山蔵王権現きんぷせんざおうこんげんが奈良吉野山から分祀され、古代信仰を受け継ぐ修験道場しゅげんどうとして、不動堂とその別当大善寺が存在していたのである。

衣笠城が世に知れることになるのは、治承四年（一一八〇）八月、源頼朝が石橋山合戦で敗れ、その直後に行われた衣笠合戦である。

武蔵国畠山（埼玉県比企郡嵐山町）を本拠とする畠山重忠は、由比浜合戦の屈辱を晴らすため、二十六日の早朝、衣笠城に攻め寄せた。大将として大手を攻めたのは、武蔵国留守所総檢校職すくねさうけんせうしやくで秩父家督の河越重頼と江戸重長らであり、ここを守ったのは、三浦大介義明の嫡子義澄と佐原義連よしたつ。搦手を攻めた畠山重忠に対峙たいじしたのは和田義盛、三浦義明の娘婿金田頼次である。また、中陣は

長江義景よしかげ、大多和義久が守った。この金田頼次は、上総国望東郡金田郷（木更津市金田）を領す上総介広常の弟であり、三浦郡金田村（三浦市南下浦町金田）にも館があつたらしい。大多和義久は三浦義明の三子で、長江義景は、三浦家の家の子である。そして、畠山重忠は、三浦義明の外孫である。



三浦義明は、この日の夜、嫡子義澄（五十四歳）らを集め、生きて勲功をあげるよう諭し密かに脱出させ、一人城に残り、翌朝、河越重頼、江戸重長によって討たれた。八十九歳であつたという。

闇夜に乗じて脱出した義澄らは、久里浜から安房へ向

かうが、海上で図らずも北条時政、岡崎義実（三浦義明の弟）らの船に遭遇し、手を取り合つて再起を誓う。この一か月後の十月七日、源頼朝は、念願の鎌倉入りを果たすことになる。

頂の大露岩は、衣笠合戦の際、三浦義明がここから戦況を見たとして『源平盛衰記』は伝えられている。この物見岩の下から、平安末期、三浦氏が檀越だんおつとなつて営んだとみられる経塚が大正八年に発見され、青銅の経筒きんこうや鏡、青白磁の合子ごうすや唐子形水滴からこ（共に宋からの将来品）、鉄製の火打鎌、刀身などが出土し、これらは上野の東京国立博

伝長江氏の五輪塔

葉山町長柄の殿ヶ谷は、長江義景が館を構えた所と伝え、義景大明神の裏には、伝長江氏三代の五輪塔がある。義景は三浦大介義明の家の子である。近くの御霊神社と真言宗長運寺は、義景が祖父の鎌倉権五郎景正のために創建したと伝え、長運寺の本尊は衣笠城内の箭執不動を奉祀したという。長江氏は義重（義景一明義一義重）のとき、宝治の乱で三浦氏惣家と共に自害したが、家は残されている。（京急新逗子駅よりバスに乗り長柄橋下車）

博物館に保管されている。

大善寺（曹洞宗）

大善寺は、奈良時代の僧行基が創建したと伝える古刹（こまう）で、三浦氏の学問、仏教信仰の中心的な存在であった。明治維新まで不動堂の別当寺であった。現在の本尊は、不動明王（別名箭執不動）で、衣笠城主の三浦為継（ためつぐ）が、後三年の役で、源義家（義家―為義―義朝―頼朝）に従って奥州へ出陣した際、戦場の矢を除けたという伝承を持つ。

本尊の脇に祀られているのは阿弥陀三尊（市指定）で



箭執不動と矜羯羅、制陀迦童子

ある。中尊の阿弥陀像は体軀が古様の割矧技法で、脇侍

の観音像は一木造りであり、この二体は平安末期の造立とされるが、勢至菩薩は江戸前期の補造である。

土塁

大善寺下の坂道を上りつめた所に、土塁の一部が残る。もとは高さ約三誠、長さ三十五誠ほどあったが、横浜横須賀道路建設のため崩された。ここは、大楠山から平作の駿河坂を経て衣笠城に入る搦手である。畠山重忠が攻め寄せたのは、この辺りであろう。

不動の井

湧水の井戸に不動尊が祀られている。井戸の前が館跡と思われ、湧水は生活用水として使われたのであろう。

武者隠し

城山を下り大手口の手前にくると、急に崖が迫り急カーブにさしかかる。大手に相応しい構え武者隠しである。城兵がここに隠れ、敵を不意討ちするもので、崖上に、四方を展望する櫓が備えられていた。

城に向かって右が大谷戸川、左が深山川である。川を

せき止めれば、城は堀に囲まれ、敵の侵入を防げるわけである。この辺りは、元禄年間（一六八八—一七〇四）と大正十二年の地震により隆起しているから、川底は、今より二〜三誠深かったと思われる。空堀は、平成十二年、三浦縦貫道路の建設によって消えてしまった。

磨崖仏

焼場谷戸を入ると、右手十誠余の崖上に、磨崖仏（市指定）がある。磨崖仏とは、自然の岩壁を利用して彫った仏像をいう。三浦半島唯一のもので、阿弥陀如来、観音、地藏像などが線刻され、納骨穴もあり、写経石らしき川砂利が残され、墨書痕、木杵をはめた痕跡もある。右下に、鎌倉期と室町期のやぐらが一基ずつ残されている。三浦氏の廟所であろう。満昌寺には、磨崖仏のレプリカが保存されている。

満昌寺（臨済宗）

本尊は釈迦である。『吾妻鏡』によれば、建久五年（一一九四）九月、源頼朝は、幕府創設の捨石となった三浦大介義明を弔うため、一寺の建立を志し候補地を巡

検させている。その地に創建されたのが、満昌寺である。山号は義明山といい、寺号も義明の法号に因む。

御霊社は建暦二年（一一二二）、幕府の侍別当和田義盛の建立と伝え、三浦義明の衣冠束帯の坐像を祀る。ほぼ等身大で笏を持ち、老将ながら、気迫のこもった表情である。御首の内側にある建久五年という墨書は、後世の筆とみる向きもあり、像自体も鎌倉末期の作であることから、満昌寺の候補地を巡検させた「建久五年」という『吾妻鏡』の記述に合わせ、墨書したという見方もある。なお、御霊社に祀られている源頼朝木像は、元亀元年（一五七〇）、鎌倉雪ノ下御谷にあった十二院の内の淨国院に奉納されたものが、明治維新の神仏分離の際、満昌寺に移されたものである。



三浦義明を神格化した珍しい像（国指定）